

不可視 の身体

翻訳家 上野圭一

U F O 間接遭遇と予知夢

最近、おもしろい仕事をしました。精神科医の加藤清先生にロングインタビューをして、それをそのまま本にするという仕事です。加藤先生は知る人ぞ知る「伝説の精神科医」ですが、著作や論文がきわめて難解で凡俗にはなかなか咀嚼しにくいという定説のあるお方でもあります。そこで、神戸は芦屋のお宅に連日お邪魔して、根掘り葉掘りお話を伺い、その深遠な思想の一端を凡俗にもわかることばで語りなおしていただくというのが企画の意図でした。

もちろんそれは先生にとってはまことに迷惑な企画ではありました。事実、先生はその本の「あとがき」の冒頭にこう書かれておられます。「この本はまったく私の意図から生まれたものではない。少し大袈裟に言えば、虫が湧いたように、また天から降ったように現れた。ある日、春秋社の神田明社長と佐藤靖清編集長が上野圭一さんと共に、U F O の選んだ私のマンションの一室に侵入してこられて、私のうわ言を聞き取り、持ち去った後の祭りに出来上がった本である」

あらぬ誤解を招かないように、まずは「U F O の選んだ」というくだりの説明をしておきましょう。それはインタビューの途中で出てきたエピソードのひとつで、じつは加藤先生は間接的にU F O に遭遇しているのです。「間接的に」というのは、オーストラリア在住のお嬢さんとお孫さんが接近遭遇していて、先生は否応なしにその影響をこうむっているという事情があるからです。お嬢さんとお孫さんはU F O と遭遇して以来ときどき同じ夢をシンクロして見るようになり、その夢が「予知夢」であることが多いらしいのです。予知夢はたとえば、こんなかたちであられます。

「僕の片方の目が真白になっている夢を二人とも見るんです。そのあと娘は僕に電話を寄越して、『お父さん、目が悪いのと違う?』『いや、昨日、病院へ行って白内障の手術を予約してきた』『それならいいけど、早く手術しないといけないよ』というやりとりがありました。内緒でそろっと手術して、知らん顔をしていようと思ったんだけど、それがばれた。それから、僕が旅行に行こうと思ったら、向こうから『今度、旅行に行かれるようだけど、注意したほうがいいよ』とかね。この間もインドへ行こうと思ったら、『おじいちゃん、インドへ行かれるそうだけど、注意しないといけないよ』」

「このマンションに住む前は、ここから歩いて10分程の別のマンションにいたんですが、ある日、『私のマンションの109号室が空いたから、そこへ移ったほうがいい』と、娘から電話がかかってきた。オーストラリアにいるくせに、なぜそんなことがわかるのかな、と思って109号室を見に行ったら、たしかに空いている。引っ越し屋を呼んで、その日にすぐ、転居の用意

をし、僕はここに移りました。ここへはU F Oによって転居させられたようなものです」

「そういうことが非常に多いですね。それも僕はありがたいことだと思っている。僕にとってあまりマイナスなことはない。言われたとおりにやったら必ずうまくいく。だから、老いては子に従えというのではなく、老いてはU F Oに従えと」

L S Dの自己実験と治療への応用

1921年生まれに加藤清先生は「精神医学は臨床医学の基礎学である」という先駆的な見識のもとに京都大学医学部で精神医学を学ばれ、基礎医学の研究をふりだしに臨床医学に転じ、国立京都病院精神科、京都博愛会病院精神科などをへて、現在も隅病院顧問医師をつとめておられます。先生はいま、霊能者とペアを組むというユニークな方法で精神疾患の患者の治療にあたっています。ひとりの患者に対して、加藤先生が「ボディ」を、カウンセラーが「マインド」を、そして霊能者が「スピリット」を診るという、文句なしのホリスティックな治療です。その長い臨床医生活は文字どおり波瀾万丈であり、インタビューしたテープの書き起こし原稿は何分の一にも縮めなければならなかったのですが、ここではそのごく一部だけをご紹介します。

研究者時代、先生は間脳をテーマにしておられました。間脳を電極で選択的に刺激して血中アドレナリンを高め、精神疾患の治療に応用しようとした研究はなかなかうまくいかず、電極ではなくメスカリンで刺激して実験的に「サイケデリック間脳症」という一種の変性意識状態を起こす研究に転じました。みずからメスカリンを合成して実験をはじめましたが、副作用などがあり、コントロールがむずかしいという問題にぶつかっていたころ、おりしもスイスのサンド社から合成されたばかりのL S Dが送られてきたのです。先生はさっそくL S Dの自己実験をおこない、その絶大な効果を確信されました。

「・・・3時間後、右前方に青みを帯びた等身大の自分が見えるわけです。自己像幻視ですが、僕にとっては非常におもしろかったです」

Q・現在の自分がですか？

「そのときの自分です。そうすると自分がいるところがだんだん変わってきてまして、200階ぐらいあるビルの屋上で、夜空を背景にして、セラピストと対話しているんです」

Q. 超高層ビルですね

「空気が非常に希薄になって、息苦しいんです。空気が希薄になったというより、だんだん真空に近づいてきている。過去から未来にずっと時空間が広がっていて、非常に抽象的な時空間に感じるんです。ちょっと手を上げたら、200階ぐらいの高さなので、月に手が届く感じなんです（中略）。下のほうを見ると、ビルがたくさん並んでいて、一つ一つのビルが各世紀を代表している。時間が区割りされて視覚的に見えて、ビルとして断片化している。100年を担ったビルが過去から未来にずっと並んでいるわけです。ヨーロッパ大陸がずっと彼方のほう

不可視 の身体

に消えていくような感じがしました。ヨーロッパが遠ざかって消えていくんです（中略）。で、いつの間にか自分がスフィンクスになっている。そうすると、抽象的な表現ですが、各大陸のいろいろな文化が見えてくる感じがして、人類の歴史が一気に全部わかってしまう。そういう体験がありました。非常に静寂な月光に照らされて、人々の生活が終わると同時にまた始まっていくような感じを、自分がスフィンクスになって見ている。全人類を見通しているわけです・・・」

そんな体験をもとに、加藤先生は果敢に精神疾患の治療にLSDを使いはじめます。患者に投与すると同時にご自分も服用し、患者の精神の旅路の同伴者となって、トラウマや問題点に患者自身が気づく契機をあたえていくと、精神分析的な治療では何年もかかる分裂症や神経症の治療がごく短時間でおこなわれ、永続的な治癒がおとずれるケースがあるのです。そのケーススタディーもいくつかお聞きしたのですが、残念ながら紙面の都合で割愛しなければなりません。関心のある方は『この世とあの世の風通し——精神科医加藤清は語る』（春秋社）を読んでみてください。おもしろいこと請け合いです。



エネルギー身体を見る

加藤先生のLSD体験のお話を伺いながら、わたしは70年代はじめの数年間にはまりこんでいた自分の体験をありありと思い出しました。当時、カリフォルニア州バークレー市に住んでいたわたしは、その時代、その地に住む若者の例にもれず、同世代の仲間たちのガイドでLSDをはじめとするサイケデリックスの洗礼を受け、飽きもせず「トリップ」を繰り返していました。

そして、その体験のごく初期に、まったく思いもかけず「経絡」や「ナーディ」で構成される「エネルギーボディ」を目撃することになったのです。最初、それはガイド役の友人のからだの周囲にぼんやりと虹色に輝く輪郭のようなものとして立ちあらわれました。「これがオーラというやつなのか」と考えながら、ふと自分の手に目をやると、5本の指先から虹色に輝く光が長くゆらめきながら放射しているのが見えました。気がつくと、指先だけではなく全身が虹色の光を発して、輪郭がゆらめいていました。腕や手足の輪郭は炎のように姿を変え、その炎の先端は渦を巻いているようでした。

のちにバークレーの書店で『微細身——その本質と影』（デーヴィッド・タンズリー著、邦訳はイメージの博物誌『霊・魂・体』笠井叡訳、平凡社）を立ち読みしていたとき、そこにタントラ仏教の人体図像を見つけたわたしは、あっと驚きました。7万2000本とも35万本ともいわれる「ナーディ」が全身をくまなくネットワークしているだけではなく、肉体の輪郭を大き

くはみ出して、燃えさかる炎のように外部に向かって渦を巻いているその図像は、LSDの影響下で見たあの虹色の光の渦と瓜ふたつだったのです。

虹色の輪郭は十数年後にまた、LSDの非影響下でもまったく同じ姿をあらわしました。やはりカリフォルニアで「ホロトロピック・ブリージング」という特殊な呼吸法をしていたことです。その呼吸法の開発者であるスタニスラフ・グロフの指導のもと、大勢のグループセッションとしておこなわれたそのワークショップで、はからずも自分の指先から光が放射しているのを目撃することになりました。薄暗がりのなかで横たわりながら、わたしは両手の指先から放射しているその虹色の光に懐旧の念をそそられ、5本ずつの光の筋を交差させたりして遊んでいました。光が交差するたびに、ごく薄い貝殻がふれあったときのような、しゃらしゃらという乾いた音がかすかにしたような気がしたものでした。LSDはもちろん、なんの薬物も摂取せずに、特殊な呼吸を続けるだけでLSD服用時と同じヴィジョンを見ることができたのです。

不可視の身体とエネルギー医学

「太古の人たちはこれを見ていたのではないか。くりかえしこれを見て、あの『ナーディ図』や『経絡図』を完成させていったのではないだろうか」わたしがそう考えるようになったとしてもさほど突飛ではないことは、ご理解いただけたと思います。そう考える道筋の先にあったものは、不可視の身体に関する知識をたずね歩く旅でした。ヴェサリウスの『人体のファブリカについて』以来、しだいに機械論的な身体観が主流となり、もっぱら物質的な身体だけを相手にして、あらゆる疾患の原因を物質的身体の物理的・化学的作用機序の不全に還元する近代医学が全盛期をむかえるに至る途上で失われていった不可視の身体に関する人類の知識の痕跡をたずね歩きながら、失われたもののあまりの大きさに慄然とすることもしばしばでした。そしてやがて、その痕跡の一部だけでも発掘して、新しい身体観の、ひいては新しい医学観の構築に再利用すべきではないかと考えるようになったのです。

当然のことながら、そんなことを考えていたのはわたしひとりではありませんでした。まわりを見まわすと、「波動医学」(リチャード・ガーバー)、「直感医学」(キャサリン・メイス)、「非局在的医学」(ラリー・ドッシー)などの提唱者たちが共通して持っているのは、人間存在を微細エネルギーの動向によって把握する「エネルギー医学」的な認識であることがわかってきました。加藤先生のような、ことばの真の意味でのホリスティックな観点に立てば、近代医学が認識できるのは「ボディ」の領域だけであり、「スピリット」の領域は深遠な変性意識状態にある認識によってのみ把握が可能であり、「マインド」はその中間領域ということになりますが、その三つの領域すべてを統一的に把握する概念として「微細エネルギーの動向」をもち出すのが「エネルギー医学」だということができるでしょう。

変性意識で認識したリアリティを、意識状態の変化に応じて立ちあらわれる複数の身体とみ

不可視 の身体

なす伝統は世界中にあります。ヨーガの「粗大身」「微細身」「元因身」、中国医学の「魂」「魄」
や「精」「氣」「神」、古神道の「顕身魂」「和身魂」「幸身魂」「奇身魂」、神智学の「肉体」「エ
ーテル体」「アストラル体」「メンタル体」、人智学の「肉体」「エーテル体」「アストラル体」
「自我」、『チベットの死者の書』の「意成身」、仏教の「法身」「報身」「応身」などがそれです。
現代の科学者にも同じ認識を共有している人たちがいます。ライアル・ワトソンの「第一の身
体システム」と「第二の身体システム」、アーノルド・ミンデルの「ドリームボディ」と「リ
アルボディ」、ロバート・モンローの「第一の身体」「第二の身体」「第三の身体」などがそれ
です。科学者たちのそれは臨死体験や夢体験といった変性意識状態の産物がヒントになってい
るようです。

こうした「不可視の微細身体」の相互関係と癒しへの応用をマジメに研究する学会があると
すれば、それは人体科学会以外にありえません。欧米のエネルギー医学の学会などと積極的に
交流して、その領域に探りを入れてくださる方の登場を期待します。わたし自身は人生もすで
に林棲期にあり、元来、研究生活になじむ者ではありませんが、若い世代でその領域に関心を
もつ人がふえていることは確かです。ドイツで核医学の研究をしながらガーバーの『波動医学』
の翻訳をしている若手医師もいます。『光の手』のバーバラ・ブレナンが主宰するエネルギー
医学の学校に留学している人も何人かいると聞きます。ホメオパシーの学校で学んでいる人も
いるそうです。そんな人たちのなかから、本格的にエネルギー医学の研究をする人が出てくる
ことを願いたいものです。

